

**編集後記：**この第7号には調査ノートが2編掲載されています。2008年の第6号以降、今回を合わせて8編の興味深い調査結果が報告されました。そのほとんどが研究を本務とされない方々からの投稿です。会員各位が日々気象と向き合う中で独自に調査を行った貴重な報告となっています。調査ノート新設時の思惑通り、いわゆる原著論文である論文・短報よりも間口が広い、情報発信の場となっていますでしょうか。

栄枯盛衰、日進月歩、時の流れはとどまらず。調査ノートのように新規に設けられるコーナーもあれば、時代とともにその役目を終える企画もあります。例えば1950年代の黎明期の頃には、「雲鏡」という、日々の雑感、学会への意見などが数百字程度で述べられている企画など、結構面白いコーナーが見受けられます。御興味があれば、是非オンライン天気で検索してみてください。「雲鏡」は手作り雑誌ならではの特殊な割付だったりして、視覚的にも楽しい企画だったよ

うなのですが、これも残念ながら1960年頃に終了しています。

このようななか、創刊当初から続いている記事も当然ながら存在します。論文、解説のような主原稿はもちろんですが、実はこの編集後記も続いているんです。なぜここまで続くのか。それは言うまでもなく「投稿が途絶えないから」です。編集後記は編集委員がいる限り投稿は途絶えませんが、その他の記事はそうはいきません。

調査ノートが息の長いコーナーになるかどうか、それは会員の皆様からの貴重な一報にかかっています。気象業務の傍らで調査したその地方独特の気象について、予報士としての使命感のもと調査した気象災害事例、高校の部活動で実施した観測のまとめなど、手元に眠っている貴重な調査事例はありませんか？今後とも多数の投稿、間口を広く開けてお待ちしております。

(青柳暁典)